

移転成功のために私たちができることを考える

NPO法人 大阪ごみを考える会

理事長 森 住 明 弘

1. 30年間、住民側のアドバイザーとして関わってきて

<1>埋立地問題では先進的

◎ごみ処理施設や下水処理場などの“迷惑施設”と呼ばれる施設建設に直面した住民の支援を主な仕事にしてきた。

◎約30年前、天理市住民が問題提起した奈良市の米谷の埋立施設建設問題に関わらしてもらった。

◎住民側・行政側の真摯な努力により、見事に平和的解決！

①県の調停委員会が、よそと違い、“住民寄り”で、住民の不安解消に役立つ施策を積極的に行政に勧めてくれた。

②ボーリング調査をするなど、当時としては珍しい充実したアセスを実施し、建設後も水質監視をできるようにした。

<2>焼却施設移転問題では後進的

◎このスタンスで、奈良市側が焼却工場移転問題も対応していれば、先進的解決事例を全国に示せていたと思う。

◎しかし、“いうは易し・・・”で、愛知県津島市他11町村が解決したような、住民と操業協定を結び、一定期間操業後移転するという先進的解決に尽力する幹部職員が現れなかった。

◎それは、現実の紛争現場で何が主要争点になり、それに行政側としてどう関わるといいのか？を学習する“開明”派の職員がいなかったからである。

<3>主要争点の変化

◎80年代頃までは公害の有無が主要争点

◎しかし、これは技術的対策により“裁判で勝てる”状況でなくなる。

◎それで、アセスの実施法が主要争点になり、住民の参加対策が徐々に充実。

◎建設過程と、操業後の意志決定の“不透明さ”が主要争点になり、“夢と現実の落差”を指摘され、行政の信用度の高低が問われるようになる。

<4>行政側に望むこと

◎「官」に「忠」にならんとすると「公」に「忠」ならずのジレンマ問題であると自覚して欲しい。

◎非当事者の時は、“どこかに必要”と、「理」ではわかってくれるのに、いざ当事者になると“イヤ！”という「情」が先立つのはなぜだろう？

◎今から見ると「黒船」は先進文明の象徴であったとわかるが、当時は“たった四杯で夜も眠れな”かったから、“開国”でなく“攘夷！”が多数派になったのではないだろう

か？

- ◎開明派のリーダー達は、この不安心理を活用して旧体制を潰し新体制に移行させ「開国」した。
- ◎残念ながらごみ処理施設は、いくら「理」で説明しても、「情」で攘夷！したい「黒船」
- ◎建設されると、“悪いことが起こるのでは？”という懸念を払拭できないから
- ◎それなのに、奈良市側は「官」の現状(=旧体制)に「忠」になろうとするため、これまで指摘したような候補地住民の不安と不信を高めざるを得ない施策を頻発する。

<5> 私たちが「公」に「忠」になる道を探そう

- ◎今の場合の「義」とは何？＝迷惑施設と共存すること。
- ◎「忠」とは何？＝ホンネで共存できる気持ちになること。
- ◎そのための受け入れ条件を「官」任せにせず先ず探し、自分の居住地区の住民に説明し“攘夷！”心を和らげてもらうこと＝「公」ではないだろうか？
- ◎これまでのように「官」が主演者、私たちが助言者の旧体制でなく、私たちが主演者で「官」が助言者の新体制に移行させる道を探すことが肝要

<6> 当面した方がよいこと

- ◎先ず学習する必要があるのは、現在の清掃工場の運用実態と、周辺住民のそれに対する評価・批判を、私たちの目線で見te 感じること。
- ◎その次に、全国の先進地区の現状を知るため、調査に赴き、行政側・住民側のホンネを聞き、私たちが何をしたらよいか？と、何をしたらいけないか？を学ぶこと。
- ◎それらと並行して、候補地を絞り込み、そこの住民との関係性の創り方を議論し、実践していくこと。